

巻頭

エッセイ

アジ研の本のつくり方



星野 妙子

アジ研の本は基本的に2年を単位に組織される研究会の成果である。多くの場合、研究会を企画し参加者を募る「主査」とよばれる研究者が本の編者となる。四半世紀以上まえの筆者が入所した頃の頃、先輩諸氏がよく自嘲気味にアジ研の本は“乱反射”だと語っていた。複数の執筆者がそれぞれに書く章が勝手気ままな方向を向いていて、本の焦点が定まっていないという意味である。かくいう私も自分の問題関心に執着して屈折度引き上げに貢献し、しばしば先輩主査の足を引っ張った。今さらながら申し訳なさに心が痛む。

当時すでに雑誌の査読制度は存在していた。一方、乱反射への反省からかアジ研に単行書のための査読制度が導入されたのは、確か1990年代後半のことである。それによって編者としての主査の仕事と責任は格段に増した。なにしろ査読結果次第では本が出ないこと、章が落ちることもありうるというルールができたのである。耳の痛い批判や注文をオブラートにつつま執筆者に伝えて、書き直してもらわなければならなくなった。昔の筆者のような執筆者がいれば、主査の負担はいや増すことになる。筆者も「査読結果は天の声」との前置きを添えて、かなりな無理をお願いしたことが多々あった。ここでも申し訳なさに心が痛むことしきりである。主査諸氏の奮闘努力の甲斐あって、アジ研の本のまとめ具合はかなり良くなっていると思う。

このような苦勞がありながら、皆なぜ研究会を組織し本を出そうとするのか。制度設計がそうなっているという理由が大きい。筆者はそれ以上に、研究会には研究会でしか味わえない醍醐味があるためと考えている。すなわち、協働で新し

い知見を拓く醍醐味である。なぜ本を出したいかといえば、協働で拓いた無形の知見を、本という形にして残したいと思うためである。ただし研究会で常に醍醐味を味わえるとは限らない。協働のダイナミズムが生まれるかどうかは様々な条件にかかっている。魅力的なテーマであるか、関心を持つ研究者がいるか、彼らに研究会に参加できる条件が備わっているか、等しく熱意をもって協働作業に参加してくれるか、等々である。その意味ではどれひとつとして同じ研究会はない。幸いにも筆者はこれまで研究会の条件に恵まれてきた。そこでの協働作業が果たして実を結んでいるかを評価するのは、本が出た今となっては、読者である。

アジ研の本づくりを支えてきた制度が今、大きく変わろうとしている。研究成果発信の主な手段が、近々、これまでの有料印刷物からデジタル媒体による即時無料公開へと変更されるためである。印刷本とデジタル媒体では読者の成果への接近法が違ってこよう。本ならば手に取って全体をながめ、序章を読んで編著者の意図やメッセージを理解し、章に読み進む流れが想像できる。しかしデジタル媒体であれば、読者は読みたい章に直接アクセスする可能性が高い。そうなった時に、協働で拓いた知見や本としてのまとまりは、どれほど重視されるのだろうか。そのように考えると、変更は成果発信手段にとどまらず、いつか研究会や査読制度など、アジ研の制度設計の根幹に及ぶかもしれない。仮にそうなったとしても、制度再構築が、協業により新しい知見を拓くというアジ研のよき伝統を守り発展させる形で進むことを、アジ研に育てられた研究者として切に願っている。

プロフィール

ほしの たえこ／アジア経済研究所 地域研究センター研究員

1981年入所以来メキシコを担当。これまでに4冊の単著と7冊の編著を研究所から出版している。